

日本看護歴史学会

會報

日本看護歴史学会
第12号
1992年4月20日

歴史を知る 歴史研究を楽しむ

山本 捷子

看護基礎教育課程では一九九〇年度から教育課程が改訂され、看護歴史の独立した科目はなくなつたが、看護の概念や技術を学ぶ時に、その起源、創始者、変遷や変化させた要因、すなわち看護の歴史を知らずして、今を知ること、さらに将来の方向を展望することはできない。看護教育に携わる者が自分の担当する分野に関する歴史を知るためには、まずその分野に興味をもつことと、楽しんで探究することが肝要ではなからうか。

「歴史研究」となると、単に歴史を知るといっただけでなく、研究的姿勢や適切な方法論をもとに歴史を探究することが必要になる。また折角探究したことは論文という形で他者に伝わるようにしなければならぬ。この辺りから「歴史は好きだが、研究はチョット」と構えてしまい意気込みが薄れがちになるのではないだろうか。

しかし、歴史探究は「興味」と「熱意」によって、案外と容易にスタートでき、かつ発展させ得るものだということを私は体験的に知った。

歴史研究は溯行し、歴史記述は下行する(エドアルト・マイヤー)

歴史研究の第一歩はまず問題意識をもつこと。私はある人に「なぜ看護婦はキャップを被るのか」と尋ねられてから、キャップの歴史への探究が始まった。看護婦のキャップのルーツはどこか、形は

どのように変化したのか、日本にはいつ誰が移入したのかを調べたくなった。それは日赤と聖路加の違いから、日本の近代看護の創始へと遡り、さらに欧米の看護の歴史との関係を追及しなければならぬ。当然、ナイチンゲールについて、またそれ以前の宗教的看護のこと、アメリカへの波及についても調べる必要が出てきた。

問題意識の後は適切な研究方法、研究計画と史料収集が重要なポイントである。例に私の体験を述べてみよう。

数年前、ロンドンに行く機会があり、ナイチンゲールの銅像(クリミア戦争記念碑)を探して、うる覚えの「ウォータール」を頼りにテムズ河畔・バックキンガム宮殿・トラファルガー広場辺りを数時間も右往左往する羽目になってしまった。しかしお蔭でロンドンではイース・キャベルの方がナイチンゲールより有名であり、彼女の石像を教えてもらうことができたが、十分な下調べの大切さを痛感したことである。

セント・トーマス病院では、カタコトの英語で話しかける蛮勇が効を奏して、形の違うキャップを被っているナース達の写真を撮ることができた。



ベルビュー病院看護学校のレリーフ
(ニューヨーク)

アメリカに行った折には、ボストンのマサチューセッツ病院とニューヨークのベルビュー病院を訪ね、キャップに注目した歴史的写真やレリーフに出会うことができた。焦点を絞っていると、それを発見した時の胸躍るほどの感激、喜びは想像以上のものがある。外国でも看護歴史に興味をもっていると、寸暇を割いて記念碑や博物館(考古館)を訪れたり、現地の人に様々な協力を得ることが出来る。「足を使うこと」と「誠実さと熱意」が不可欠のようである。まだ史料が不十分で論文にはできないが、「過去と相手は変えることができない」のだから、時間をかけて、楽しみながら追及し続けたいと思っている。

日本看護歴史学会第5回大会

収支決算報告書

<収入>	
大会参加費 (4000×44名)	176,000
懇親会参加費 (3000×27名)	81,000
大会総会費	50,000
繰り越し金	137,803
昼食代 (700×18名)	12,600
合 計	457,403
<支出>	
講師謝金・お車代 (2名)	125,000
会場使用料	30,000
懇親会	60,000
参加者昼食代 (18名)	12,600
幹事・世話人昼食代	18,300
事務・通信・雑費	5,200
合 計	251,100
<差し引き残高>	
457,403 - 251,100 = 206,303	
(次年度大会費用へ繰り越し)	

○分科会だより○

東京地区看護史研究会では、昨年八月三十一日に、救世軍清瀬病院において「救世軍医療史」「ホスピスの歴史」について学び、あわせてホスピス見学をしました。

救世軍は一八七八年、イギリスのメソジスト派のウィリアム・ブリスによって軍隊組織の伝道会として創始されたものです。日本では一八九五年ライト大佐一行14名による活動が開始され、山室軍平をはじめ志ある人々の参加を得て、

伝道と社会事業活動が盛んに行われるようになりました。特に一九〇〇年の東京吉原遊郭における激しい婦人救済・廃娼運動に始まり、下町一帯における児童保護、労働紹介、宿泊所、医療活動、災害慰問等、一九四一年の解散に至るまでと、戦後四六年に復活してから現在も、民間の社会福祉事業として大きな貢献をしています。

医療活動としては一九一二年に御徒町病院を開設し、結核患者保護指導、診療班の訪問看護活動を開始しています。三四年には看護婦養成、三六年には産婆養成も始

めています。三筋町と西新井の病院は四五年の戦災で消失してしまいましたが、一九一六年に開設された杉並療養所は戦後はブリス記念病院に、三四年に清瀬に開設された清心療養園は清瀬病院に発展しています。時代の要請を先取りしながら、七八年には老人病棟を、八九年にはホスピス棟を発足させています。

わが国のホスピスは、聖隷三方原、淀川キリスト教病院、国立松戸病院等、まだ数箇所設置されているに過ぎません。進み過ぎた医学に対し、真の人間医療を追及

していくところ、ホスピスは医療・看護における重要な課題になるものと確信した次第です。

わが国では宗教団体による医療・看護はあまり表舞台には出てきませんが、信仰にもとづいた篤い心と浄財による医療活動が地道に行われていることを実際に知ることができました。それ以上に、人間を大切にしたい「こころの医療」を具現化しているケアフルなホスピスの設備や看護の状態、心温かな関係者の方々と接し、救世軍の歴史を学ぶと共に、充実した感激の時を持つことができ感謝しております。

参加者：小山千加代・榛葉益枝
宇佐美千恵子・山本捷子



救世軍 清瀬病院見学

